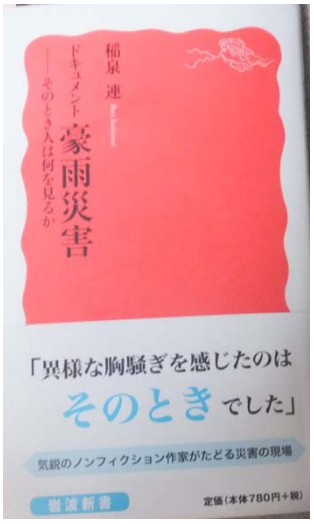
稲泉連『ドキュメント豪雨災害』を読む

このところ梅雨から台風シーズンにかけて、毎年のように豪雨災害が起きている。先日の広島土砂災害をはじめ、今年も豪雨に起因する災害が頻発している。昨年も梅雨前線による大雨で九州各地で被害、さらに台風 26 号による伊豆半島での豪雨被害、京都嵐山の桂川の氾濫などが記憶に残る。

どうも豪雨災害のことが気になるので、「そのとき人は何を見るか」というサブタイトルのついた件名の岩波新書(2014 年 6 月刊)を一気に読んだ。2011 年 9 月の台風 12 号による災害は、紀伊半島大水害と後に名付けられた。「同じ年に東日本大震災が発生していたからだろう。この豪雨災害は大津波と原発事故の陰に隠れ、どこか印象が薄められているところがある。しかし、それは日本の災害史にとって特筆すべき大きなものであった。」



本書は紀伊半島大水害の実態を伝える迫真のドキュメントである。取り上げるテーマ・地域としては、「深層崩壊する山々」奈良県十津川村と「那智谷を襲った悲劇」和歌山県那智勝浦町である。「深層崩壊」とは、山の斜面の表面が滑り落ちる「表層崩壊」に対して、山腹が奥深い箇所から崩れ落ちる崩壊を指す。表土だけではなく地盤そのものが崩れるため、「山そのものが動いた」とも表現されるという。

この「深層崩壊」をはじめとした紀伊半島でのドキュメントは、臨場感をもって伝えられないので、ぜひ本書を読んでほしい。

本書は「首都水没への警告」として、東京の脆弱性と災害リスクも取り上げている。名古屋を襲った伊勢湾台風についても言及している。

ここでは本書で引用してある河川工学者の高橋裕氏の主な指摘を紹介しておきたい。

「水害という災害は過去の都市の開発の履歴によって、様々な形に変化する社会現象」

「災害というものは本来、被災した側から調べるべきもの」

「---雨の量や川の流量ばかりを気にして、被害を受けた地面ではなく空から災害を調べていくんですね。---この雨の降り方は 200 年に一度だった、1000 年に一度だった、という話になって、なんとなくやむを得ない災害だった、仕方がなかったという雰囲気が形成されていってしまう。対応する行政はそう思いたいだろうけれど、社会現象として災害を理解すれば全くその見え方は変わってくるのです。」

なかなか鋭く示唆に富む指摘である。今回の広島土砂災害なども「社会現象」として災害と被害を理解し検証することが求められよう。

(2014 年 8 月 25 日)